

「基準」を考える

－「差」や「荒れ」が示していること－



【理科備品搬入一第2回一】

今回の主な支援物資は理科室の備品でした。もちろん、すべてがそろったわけではなく、必要物品のうち寄付が可能となったものです。一部とはいえ、小友中・広田中それぞれに向かう2台のファミリーワゴンの荷台を埋め尽くすほどの量でした。

今回の理科備品の寄付にご協力いただいたのは、東京理科大学の朽津研究室・新井研究室、市立長野高校と県立屋代高校の理科室、大村はまの会の事務局長の苅谷夏子さんのお知り合いの千葉理化器械です。届けられたそれぞれの支援物資は、いずれも、壊れないように丁寧に梱包されており、また、理科教材に詳しくない者でもわかるように、一つ一つ丁寧に名前が付けられておりました。

4日の搬入は広田小中学校から行いました。広田小中学校では理科室がまだ使えないので、理科の実験も、実験道具を持ち込んで普通の教室でおこなっているとのことでした。今回の物資も、職員室に運んだので理科の先生の机の周りが一杯になってしまいました。



小友小中学校では一階の理科室に運びましたが、こちら一つ一つの机が一杯になってしまいました。二つの小中学校の理科の先生からの理科備品に関する要望は強く、理科教育に対する情熱が支援している私たちにも伝わっていました。今後この教具を使ってどんな授業が展開されるのか、子どもたちはどんな表情で実験に取り組むのだろうか、そんなことを考えながら搬入作業を終えました。

寄付していただいた多くの理科備品の仕分け作業を神奈川でしているとき、小学校や中学校の理科準備室に入る時のドキドキした感じを思い出しました。薬品の混ざった特有の臭いや、学校内の他の教室とは違う広さづくり、子どもにはよくわからないような物品がたくさん積まれていて、許された者だけが入れようようなそんな気がしたものでした。理科の実験の授業の日には、教卓の前に山のように積まれた実験器具があり、それをグループごと取りにいき、それこそ「協力してやらないといけない」場面なので、こんな時はケンカ中の友だちとも休戦して、実験に夢中になったことも思い出しました。そんな仕分け作業中に、広田中の大森副校長先生より FAX が届き、先週届けた顕微鏡について「担当の理科教員は、月曜日からはりきって授業に役立たせていただいております。9台もいただいたおかげで、2～3人に1台という、かなり満たされた状態で『葉の気孔』を観察しておりました」と記されており、広田中での理科授業をいろいろ想像したりもしました。

そんな想像をする中で、学校の理科準備室のことをいろいろ思い出してみると、理科備品は、長い年月をかけて集められてきていることに気づかされます。そういえば、理

科準備室の人体の模型は、ずいぶん古かった記憶があります。また、上皿てんびんの分銅も錆びていて、先生が「錆びているのは重さが正確でないかもしれない」と言っていたことも思い出しました。

日本の理科（数学）教育には、昭和28年成立の「理科教育振興法」があり、政令による基準に達していない学校の設備経費の2分の1を国が補助するしくみをもっています。一般的には、法律の適用される学校を、自治体のなかでまわしながら、自治体2分の1、国2分の1の予算で、段階的に理科備品を整えてきた歴史があるようです。つまり、歴史の積み重ねの中で、理科準備室は整えられてきたと言えるのです。

しかし、震災の被害を受けた学校はその歴史を失ってしまったわけです。こうした予想されなかった事態の中で、「基準」は基準としての機能を果たしているのでしょうか。現実にはそうした動きは感じ取ることはできません。例えば実際に、小友中学校に、年度半期の暫定的予算で備品購入として示された金額は、5万6千円です。5万以上が備品扱いですから、購入できる備品は1つです。このような「例年どおり」にしか動かない枠組みは、結果として、被害にあった／あわないで、理科の授業の充実度に「差」を生み出していますし、備品購入のめどすら立っていません。その結果、「差」を埋めることは、各学校の努力に委ねられてしまっているのです。

政令による「基準」が、本当に「基準」ならば、被災している学校への理科備品に対する予算措置はもっと積極的に推し進められなければなりません。しかし実際には、「基準」にあわせようと思えば、予算に権限をもっているはずもない教師たちが動くしかない現実には、憤りすら感じます。小友中や広田中に支援物資を届ける度に、先生方は「うちの学校は、こうやって支援してくださる方がいて、幸せです。他の学校は、大丈夫なのかと心配になります」と話されますが、『『幸せ』どころか、『基準』に照らせば、もっと要求する道がなければいけないのに…』と思うのです。

ちなみに、文部科学省は現状を鑑みて、「東日本大震災被災地への実験実習に関する設備・備品等の提供について」という事務連絡文書を出し、自治体を超える譲渡・貸出を依頼しています。また、それと同時に、ニーズの把握と支援を結ぶサイトも運営していますが、その効果については今後の判断を待たなければなりません。

【石巻の万石浦周辺の子どもたち】

今週末の万石浦の小学生の子どもたちは、私たちの到着を大変楽しみにしていたようで、午後1時半過ぎに到着した私たちに「1時に来たよ」と大声を出しながら、自転車や近づくにつれて、にこにこしながら、私たちのまわりをぐるぐる回っていました。苅谷夏子さんは、先週3日間も通ったので、もうホントに「おなじみ」という感じでした。そんな感じで始まった学習支援でしたが、なぜか、子どもたちは「荒れ」していました。

何をもって「荒れ」というのかというと、子どもたちの多くが、私たちの誰かと関係

を持つとする時、何かを話すという行為から始めるのではなく、「叩く」という行為から始めることが頻繁だったからです。棒、スリッパなど、いろいろ持ち出して、支援者を叩きながら、支援者がいやがったり、軽く怒ったりする行為を反応として楽しんで、関係を継続している様子でした。中には、その行為がエスカレートしていくような場合もありましたが、やり方によっては、「叩く」行為を「遊び」の行為にかえていく、うまい支援者のかかわり方もありました。

そんな中で、「勉強やろう」という誘いに乗って、勉強をする子どももいますが、鉛筆の持ち方、文字の形、文字の書き方を見るにつけ、震災前からも、学校生活に困難を抱えていたであろうことが予想される子どもも多くいました。「震災前、この子どもたちは、どこでどんな風に休日を過ごしていたのだろう」と思わずにはいられませんでした。きっと、「学習支援」なんて聞いても、見向きもせず、地域でいろんなことをして生活していたのではないかと思います。そんな空間が震災で奪われ、「行く場所がない。



だから、ここにいる」、そんな風に見えるのでした。子どもですから、まだまだ小さい世界でしか生きた経験がありません。だからこそ、不満を言うこともなく、今与えられた空間を精一杯活用して生きているように見えます。「叩く」行為の相手をしながら、この行為に、今後どうやってつきあっていけばいいのか、悩める時間を過ごしました。

写真は、バットで叩かれていた支援者が、それをうまく

「野球遊び」へと変えていった時に撮ったものです。でも、そのきっかけとなった子どもは、本格的な「野球」になると、そのゲームにはついていくことができず、別の支援者を相手に2人だけの野球遊びに移ってしまいました。「叩く」行為から「バットでボールをうつ」行為、そこに何人かが加わって「野球」みたいなゲーム（野球遊び）になっていく時には参加できたその子も、「野球」という大きなルールが目の前に表れるとついていけなくなる。きっと、「野球遊び」のルールの「基準」が自分から出発したものである場合と、「野球」という誰にでも通用するルールが「基準」が与えられる場合とでは、この子にとって、その違いが越えがたく大きい「差」になっているのでしょうか。かれらとの活動を通して、「学習支援」にかかわる私たちも試されている気がします。



【今後の支援の予定】6月7日現在

■6月11日(土)～6月12日(日)の第11回支援(3部隊構成)

土：小友・広田中の支援物資運搬

モビリア避難所の子ども学習支援(すたんどばいみー)

万石浦中学校避難所子ども学習支援

日：モビリア避難所子ども支援(すたんどばいみー)

万石浦中学避難所学習支援(検討中)

【ご協力いただきたいこと】

1. ご提供いただきたい物資 ※提供できそうな物品があればご連絡ください。
2. 同行していただける方 ※参加可能な週末をお知らせください。

【ご協力に感謝!!】

■今回の支援隊のメンバー(11人) 家上幸子(Ed.ベンチャー事務局長)、清水睦美(東京理科大学)、渡辺裕子(引地台中学校)、グィキムチャイ(会社員)、荻谷夏子、金子尚弘、石川和友(大和市国際化協会)、伊藤拓馬(東京理科大学学生)、すたんどばいみー：西岡歩、グェンタンティン、長畑シゲミ

■小友小中学校 ①支援物資の提供：理科備品

②寄付からの買い出しによる支援：理科備品

■広田小中学校 ①支援物資の提供：理科備品

②寄付からの買い出しによる支援：掃除用品、文具、美術用品、タオル

提供理科備品リスト：駒込ピペット、乳鉢・乳棒、電流計・電圧計、台車実験器具、抵抗器、ストップウォッチ、フィルムケース、スライドガラス、カバーガラス、ピンセット、柄付き針、スポイト、ピーカー(500ml、200ml、100ml)、ガラス棒、薬品さじ、リトマス紙、三脚、ガラス管、ゴム栓(1号～3号)、金網、棒温度計、ろうと、ろ紙、フラスコ(丸底、三角、枝付き)、試験管ばさみ、炭素棒、電子オルゴール、試験管、ペトリ皿、ガスバーナー、火成岩標本、堆積岩標本、薬品数種

■モビリア避難所 ①すたんどばいみーの子ども学習支援(5人、2日間のべ7時間)

②支援物資の提供：ポロシャツ、ボールペン、椅子、子供用Tシャツ

■山十伊東文具店(教材業者) 小友中の理科教材の購入

■三上教材社(教材業者) 教材カタログの受取

■万石浦中学校避難所 子ども学習支援(6人、のべ7時間)

■ご協力いただいたみなさま(敬称略、順不同、物資・寄付を含む)5/28～6/2

東京理科大学 理工学部 新井研究室(教授 新井孝夫、助教 渡邊 伸央)

東京理科大学 理工学部 朽津研究室(教授 朽津 和幸、助教 賀屋 秀隆)

長野県立屋代高校(清水寛・大久保喜久枝・松田明美)、市立長野高校(中野孝志)、

千葉理化学器械、洲崎仁美(大和中学校)、浅沼蓉子(Ed.ベンチャー代表)、

工藤美知子(大和中学校)、工藤美知子(妹)、松義一樹(柳橋小学校)、

権田和子(元中学校教諭)、櫻井千夏(歯科衛生士)、食のアトリエ

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援 (エドベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン)

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中中央林間3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

